

アトピー性皮膚炎治療研究会 第27回シンポジウム “Long Term Control”

室田 浩之

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚病態学教授

はじめに

シンポジウムなのに「学会ハイライト」への執筆依頼をいただき恐縮しております。そういえば乾癬の学会はあるのにアトピー性皮膚炎の学会はありませんね。アトピー性皮膚炎治療研究会はアトピーを語り尽くすシンポジウムとして年1回実施しています。私は第27回シンポジウムの会頭を拝命し、2022年2月5・6日のハイブリッド開催とし、事務局長の竹中基先生とともに準備を進めてまいりました。会場は昨年末に完成したばかりの「出島

メッセ長崎」です。

旧正月にあたる2月初旬、長崎市内はランタンフェスティバルが催され、観光随所が美しい光で彩られるため、夜の散策には最適の季節です。ところが、新型コロナウイルス・オミクロン株の感染拡大攻勢により、完全オンライン開催に急遽切り替えました。それでもこの小さなシンポジウムの聴講者数は270人を超え、活発な討論を交わす場となりました。

テーマ

本シンポジウムのテーマは「Long Term Control (LTC)」としました。ポスターは私の中にあるLTCのイメージを具体化しています。平和記念像の指差す真っ青な空には雲(フレアー)1つないのです。平和記念像の土台がカステラというのは事務局のアイデアで、甘いものの好きの私は歓迎した次第です。

さて、アトピー性皮膚炎の新規治療薬が次々と登場し、これまで閉塞感のあった診療に新たな道が開かれているように思います。それに伴い、治療到達目標は以前の寛解導入から寛解維持、寛解維持から長期寛解維持(LTC)の達成へと変わりつつあります。私は薬の投与だけでLTCを成しうるものではないと考えています。本研究会はLTCに何が必要かを考える機会としました。

新たな気づき

アトピー性皮膚炎治療で忘れてならないことが



図1 研究会ポスター
雲(フレアー)のない空です。

あります。歴史的に古い治療が新しい薬に“置き換えられてきた”のではなく、“積み重ねられてきた”ということです。2021年に『アトピー性皮膚炎診療ガイドライン』が改定されましたが、外用治療による寛解導入が基本であることはいまま変わりません。東京医科歯科大学名誉教授の西岡清先生による講演では、外用治療に皮膚科医の専門性が求められていることを再認識しました。このとき、私は大切なものを忘れていたような焦燥感に駆られ、心が震えました。

患者の症状や生活に則した外用薬を選択し、その際、主剤と基剤の特徴を勘案して処方します。その効果を自らの眼で確認していくのです。これは西岡清先生の名著『皮膚外用薬の選び方と使い方(改訂第5版)』(南江堂)で学ぶことができます。

さらに寛解導入のむずかしい例では新しい分子標的治療、JAK阻害薬や抗IL-4/IL-13受容体抗体治療が選択可能になりました。その他の全身療法、補助的治療や理学的治療を含めれば、幾通りもの治療方針を立てられますので、患者さんの多様な生活様式およびニーズに対応した治療を提供できるようになったと感じています。この「対応力」は皮膚科医の腕の見せどころだと思います。

JAK阻害薬を処方する際に感染症等の検査や画像検査が必要とされる理由を学び、薬剤の適正使用につなげるセミナーや、LTCを達成するのに必要な痒み治療、心理的支援、患者負担軽減、悪化因子対策、薬物介入を討論するセミナーを企画しました。

長崎の海洋資源を用いた創薬革命で患者負担を減らす

長崎大学先端創薬イノベーションセンターの田中義正先生に「長崎の地域特性を生かした海洋資源



図2 研究、臨床そしてライダーとして敬愛するNicola先生とともに
「予期せぬことの連続で、時間が過ぎるのが速い」という私の言葉に対して Nicola 先生は一言。“Make life a ride.”

活用型アカデミア創薬」というタイトルでご講演いただき、多くの反響をいただきました。抗体医療は全盛期ですが、抗体を製造するには多額の費用が必要となります。製薬コストを軽減する斬新な創薬モダリティについて、田中先生の取り組みを拝聴しました。日本一長い海岸線を誇る長崎の多様な海洋微生物に由来する蛋白質、そして大学で養殖している底生サメを用いたナノボディ抗体作成は創薬コストの削減につながる長崎らしい取り組みです。現在、私たちが共同研究している細胞輸注療法も含め、アトピー性皮膚炎への応用に期待が寄せられます。

再燃とリコールの免疫メカニズム

アトピー性皮膚炎の再燃に関わるとして知られるレジデントメモリーT細胞と制御性T細胞のトピックスを、リヨン大学のJean-François Nicola教授にご講演いただきました。私の尊敬する皮膚科医・研究者の一人、かつバイク仲間です。長崎大学皮膚科バイク部と一緒に、長崎内をツーリングできればと画策していましたが叶いませんでした。皮膚炎の消褪部位に残存するレジデントメモリーT細胞(Trm)や成熟樹状細胞は、慢性化と再燃に関与し、皮膚炎の寛解には制御性T細胞(Treg)が大きく



図3 ここにいつもオンラインで支えてくださった皆様に感謝します。

関わります。低容量IL-2投与によるTregの機能回復，PD-1アゴニストによるT_{rm}の再活性化抑制など最先端の話が聞けました。アトピー性皮膚炎の免疫学的寛容を誘導するアレルゲン免疫(allergen immunotherapy: AIT)療法の話も興味深く，この治療の方向性はとても期待が持てます。

おわりに

本シンポジウムで私が行き着いたのは，LTCは皮膚科学的示唆に富む治療の積み重ねによって成しうるといふ，原点回帰ともいえる結論でした。木を見て森を見るような観点からの，新しい治療モデルの開発にも期待が寄せられます。第28回は金子栄先生(益田赤十字病院)，澄川靖之先生(すみかわ皮膚科アレルギークリニック)主催で札幌にて開催されます。